

アジア化学雑誌の発刊について

Eiichi NAKAMURA **中村栄一** 東京大学大学院理学系研究科化学専攻



“Chemistry-An Asian Journal” (CAJ) が、日本、中国、韓国、そしてインド化学会を創設メンバー学会として本年7月 Wiley-VCH 社から発刊される。本誌は、化学関連全分野に関する Full Paper と短めの Review を掲載する雑誌であり、創刊当初は Angewandte Chemie (AC) 誌とのパッケージで出版される。野依良治本会元会長を Chairperson として、日本7人、中国6人、韓国2人、インド2人よりなる Editorial Board (EB) が、AC 誌と Editor in Chief (編集長) を兼任する Peter Göltz 博士の率いるドイツ Wiley-VCH 社内の編集部と協力して論文掲載に係る学術的判断を行う。アジアおよび欧米の有力化学者よりなる 60 余名の International Advisory Board (IAB) がここに助言を与える。出版母体は、参加化学会と Wiley-VCH 社よりなる Asian Chemical Editorial Society (ACES) であり、これが新規加盟国の決定など、様々な事務的な事項を取り扱う。

アジアで西洋式の科学研究が始まって以来、アジア発の研究の評価は欧米の一流誌への掲載の有無で決まってきたし、このままだと、未来永劫この状態が続くことになる。しかし、これを是とするアジア人は恐らく今やいない。CAJ 創刊は、アジアの有力化学会が一致協力して、自前のトップジャーナルを発行する、すなわち、台頭著しいアジアが自分たちの研究の方向性を自ら決定し、自ら評価するという決意表明である。日本人化学者が、この歴史的パラダイムシフトを率先して実現することを期待して本稿を執筆する。

アジア化学雑誌の必要性

昨今、本会ではアジアからの情報発信の必要性が議論され、我が国の様々な方面からも学術成果の海外流出についての懸念が表明されている。CAJ 創刊はこうした議論の実りある成果である。また一方で、出版の寡占化と学術論文の商品化、電子出版の進展、またヨーロッパ統合と中国の台頭など、最近の学術出版情勢の急速な変化に対応した結果でもある。

学術出版と国際的な情報流通の主導権争いが激化している。また、百数十年の歴史を誇った学会誌の廃止まで引き起こしたヨーロッパでの化学雑誌統合から10年を経てアメリカとヨーロッパという二つの中核が形成され、ここに中国からの投稿が集合豪雨的になだれ込んでいく現状がある。AC 誌のデータによれば中国からの投稿数は昨年すでに、日本からの投稿数を凌駕し、今年は北米全体からの投稿数をさえ超えた(図1)。J. Am. Chem. Soc.、Phys. Rev. Lett.、Nature、Science などの有力誌においても同様の傾向であるという。中国人研究者の呼び戻し、トップ研究者への研究資金と給与面の優遇措置、それと表裏一体の、高インパクトファクター (IF) 雑誌掲載に対する報償制度の結果である。これを新しいビジネスチャンスととらえる欧米出版社も多く、アジア諸国でも、アジア雑誌を自国学会の主導で創刊して主導権を握ろうとする動きも出てきた。

発刊の経緯

高水準のアジア化学雑誌の刊行には、アジア諸国へ積極的働きかけ、英知の結集、十分な資本投資と機動的な国際編集体制構築、さらに健全運営のための収益確保の道筋を描く必要がある。2003 年秋の Göltz 博士

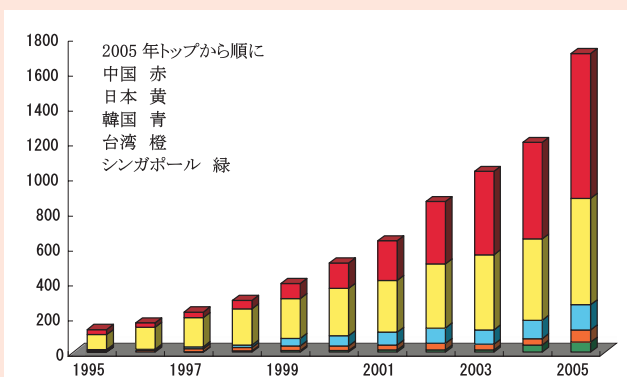


図1 1995～2004年のAC誌への東アジアからの投稿件数の推移。多国籍にわたる投稿の場合は投稿責任者の国籍が採用されている。(文献1掲載データに2005年データを追加)

の来日をきっかけとして2004年には、野依元会長を中心とした日本化学会が、The Chemical Record誌でパートナーとして組んでいるWiley社とアジア化学雑誌の出版の合意に至ったのは自然の成り行きであった。急速に変化する出版状況の中で、条件整備にこれ以上時間をかけてはアジア統合の機会を永遠に逸するという結論である。

CAJの出版費はWileyが全額負担し、加盟化学会やEB、IABは質の高い論文を世界各国から集め、野依Chairperson率いるEBはGölitz編集長と協力して雑誌の水準を高く維持する。雑誌の発行が軌道に乗る2013年からは売り上げの中の一定比率が参加化学会に還元される。その中の国別配分は論文掲載数で案分する。すなわち、自国学会員の論文が沢山掲載された国は金銭的恩恵を受けるのである。なお加盟国以外からの投稿で上がる収入が参加化学会に分配されるのはChem. Eur. J. (CEJ)と同じ仕組みである。

著名雑誌の影に名編集長あり。Gölitz博士は有機化学専攻の化学者であり、AC誌を世界のトップ雑誌に引き上げ、さらにCEJをLehn教授とともに創刊して中核的雑誌へと育てた。同編集長は、世界中の学会を行脚し、良質の研究成果の投稿を研究者個人に促す。研究者にとって個人的つながりが極めて重要なように、編集者と投稿者・読者の信頼関係が雑誌の成功にとって最も大切なことをよく理解している人物である。野依元会長が、親交の深いGölitz博士と語らって雑誌創刊を決意されたのは故なきことではない。

雑誌創刊にあたり、日本化学会は、Wiley-VCHが次のような態度で新雑誌を育てるように要求し、また自ら協力すべきであろう。「CAJは良き顧客たる投稿者および購読者との緊密な関係を重視し、そのためのサービスを惜しみません。雑誌専任のスタッフは一丸となって、掲載論文をできるだけ多くの読者に読んでもらうため、また、高水準の論文を読者に提供するためにあらゆる努力をいたします。」

今後の展望

CAJはアジア地域を中心としながらも、世界中の化学者必読となる真の国際誌とならなければならない。EBは17人、任期4年、これは分野の広がり、個々のeditorの研究水準と世界的認知度、そして各国間のせめぎ合いの結果決まったものである。今後は、各国からのCAJへの寄与の度合いが問題になるだろうことは想像に難くない。そのときにCAJは、日本からの質の高い論文の投稿に嬉しい悲鳴を上げ、採択率30%、

IF=6などという状況になっているだろうか、それとも、日本人化学者は相変わらず欧米崇拜を続けているだろうか。CEJの成功は、高水準のフルペーパーを年に何報も執筆するトップ研究者の寄与による所が大きいのだが²⁾、果たして、日本そしてアジアにはそのような化学者が欧米並みに沢山いるのだろうか。日本とアジアの研究水準が真に問われる所以である。

新しい雑誌の評価は、発足当初の編集者の決意と努力、そして投稿者の意思で決まる。端的に言って、アジア化学雑誌の成功は2006～7年に掲載される比較的少数の論文の質と引用回数（たとえば2年で5回）にかかっており、日本からの投稿のレベルにかかっているのである。日本化学会会員がアジア雑誌に積極的にかかわり、成功例を生み出すことが、化学系分野のみならず国内学術雑誌全般の活性化と再編につながると期待される。

この歴史的イベントに参加しよう

本年7月の第1号発行を目指し、Wiley-VCH/Chemistry-An Asian Journalのウェブサイトを通して原稿募集がすでに始まっている³⁾。世界中のトップクラスの審査員の協力を得て、化学関連研究全般に大きなインパクトを与える論文、今後の化学研究のバイブルとなるべき論文、社会的インパクトのある重要論文を化学関連のあらゆる分野から選び出す。重要論文は速報並みの速さで審査される仕組みも用意されている⁴⁾。

日本人化学者からの絶大な支援により、CAJが欧米主要誌と並び立つ重要学術誌となるべく、素晴らしいスタートを切ることを願うものである⁵⁾。

1) *Angew. Chem. Int. Ed.*, **44**, 4-7 (2005).

2) *Chem. Euro. J.*, **11**, 4-12 (2005).

3) ホームページは<http://www.chemasianj.org>、問い合わせはchemasianj@wiley-vch.deである。

4) 特に重要な成果は、AC誌と同じ字数制限である1万文字以内のフルペーパーとして投稿すれば、素早く掲載される規定である。

5) Chemistry-An Asian Journalの刊行について、化学と工業, **58**, 1466 (2005).